

NEWS LETTER

2021 年度 第1号

2022年2月28日 発行

目 次

時間学公開学術シンポジウム「働き方・子育て・時間」開催	1
時間学公開講座「時間学への招待」開催	2
山口大学研究プロジェクト「コロナの時間学」報告	3
時間学ミニ辞典	4
コラム「所長室」	4

時間学公開学術シンポジウム 2021 を開催しました

去る 2021 年 6 月 19 日、2021 年度の時間学公開学術シンポジウム「働き方・子育て・時間」を日本時間学会との共催で開催しました。はじめてのオンライン開催となった今回のシンポジウムでは、現代社会で子ども・親・保育士といった各主体が、どのような生活時間を過ごしているのか、またそれがどのように変ぼうしつつあるのか、という具体的な問題の多角的検討を通じて、労働環境が劇的に変化しつつある現代の育児や労働のありかたを、昨年からの公衆衛生学的・疫学的知にもとづいた世界規模でのラディカルな社会再編とからめながらうきばりにする、という趣旨のもと、3人の専門家のかたがたにご登壇いただきました。

今回コーディネーターを務められた細井浩志先生（活水女子大学）、ならびに藤澤健太所長からの企画趣旨説明と開会挨拶のあと、まず前田志津子先生（活水女子大学）からのご講演がありました。「子どもにとっての時間——カンボジアの子どもたちの生活意識調査から」と題した同講演では、カンボジアの首都郊外にある小学校の児童、ならびに長崎市内の小学児童を対象とした意識調査・生活時間調査の結果を中心的データとしつつ、カンボジアの児童と日本の児童がおかれた生活環境や感情、思考の差異についてのきわめて示唆的な知見（たとえば両国児童の一般的な生活環境のちがいに由来する、親や家族にたいする感情の差異など）が、多岐にわたって提示されました。つづく川俣美砂子先生（高知大学）のご講演「保育者の精神保健と生活リズム——コロナ禍での現状を踏まえて」では、現代日本の保育者たちがかかえる経済的・心理的な困難や疲弊について、かれらの労働環境・履歴や生活習慣、あるいは昨年からの社会生活環境・コミュニケーション形態の激変などと関連づけながら精緻に検討した成果が発表されました。また、最後の登壇者である大久保心先生（慶應義塾大学大学院後期博士課程）によるご講演「現代日本の子どもと時間」では、ここ半世紀の間にどう子どもたちの生活時間は変わったのか（変わらなかったのか）、子どもの生活時間・時間意識のありかたが、教育格差の生成とどう結びあっているのか（ないのか）、また、昨年の長期休園・休校という事態が、子どもの生活時間にどのような影響を及ぼしたか、という 3 点について、多彩なデータをもとにした説得的な議論が展開されました。

講演終了後には、時間学研究所の松村律子助教（特命）から提起された、各講演にたいする的確なコメントをもとにしたパネルディスカッションと、一般参加者からの質問にたいする講演者の応答が行なわれ、会は盛況のうちに幕を閉じました。

時間学公開講座 in 福岡 「時間学への招待」オンライン開催

時間学研究所では山口県外でも時間学を普及するため、2017 年度から毎年アクロス福岡で「時間学公開講座 in 福岡」を開催してきました。毎回多くの方にご参加いただいていましたが、昨年度は新型コロナウイルス感染症がおさまりを見せないことから中止を余儀なくされました。今年度も不安を覚えつつ「状況によってはオンラインでの開催」としながらも僅かな期待を胸に現地開催の準備を進めましたが、やはり現地での開催は難しくオンラインでの開催となりました。オンラインでの開催にも関わらず多くの方にご参加いただきました。各講座の内容をご紹介します。

第1回目：8月20日（金） 元木業人講師（大学院創成科学研究科/時間学研究所 兼務所員）
「星周円盤500年」

本講座では導入として相対性理論の発見に端を発する宇宙観のパラダイム転換に関する話からスタートしました。物理学が宗教観と社会通念の壁を乗り越えて、膨張宇宙と宇宙年齢にたどり着くまでの狂騒的だったもんだについてお話ししました。次に国立天文台が開発した Mitaka ソフトを利用して地球から宇宙の果てまでの宇宙旅行をシミュレートし、宇宙の大きさを疑似的に体感してもらい、最後に星の誕生と死のサイクルによる宇宙の物質進化の歴史について、時間スケールに重点を置きつつ紹介しました。



第2回目：8月27日（金） 松村律子助教（特命）（時間学研究所）
「分子レベルで見る体内時計」

「分子レベルで見る体内時計」と題して、私たちヒトも含めた様々な生物が持つ1日周期のリズムを刻む体内時計（=概日時計）について、分子レベルの仕組みを中心にお話をしました。
時計遺伝子という小さな分子が、どのようにして24時間という比較的長い時間のリズムを作り出しているのか、また、私たち基礎研究者がどのようにして体内時計の研究を行っているのか、具体的な方法についても解説しました。



第3回目：9月3日（金） 小山虎講師（時間学研究所）
「「今」が今だとどうしてわかるのか」

「「今」が今だとどうしてわかるのか」というタイトルで、分析形而上学の時間論を紹介しました。この問題は、時間が流れ、過去は確定していると考える限り、「今」という言葉が指す時点が、時間の流れと共に移りゆく過去と未来の境界点だとしても、発言があったその時点だとしても、過去と未来の境界点である「今」がいつなのかを知ることは不可能になるという問題です。また、この問題を解消する三つの方策がそれぞれ、意識、時空、実在という哲学的問題と関係していることを紹介しました。



コロナの時間学

時間学研究所は2020年秋から一年間、「コロナの時間学」というプロジェクトを実施しました。我々の社会に大きな影響を及ぼした新型コロナウイルス感染症の世界的流行という未曾有の事態に対して、時間学研究所、そして山口大学として、何か学問的に取り組むことはできないだろうか。そのような思いから、分野・学部を問わず山口大学の研究者であれば参加できる研究プロジェクトとして企画されたのが、「コロナの時間学」です。

「コロナの時間学」では、「新型コロナウイルス」と「時間」をキーワードとした文系から理系まで19件の研究課題が実施されました。2020年11月30日にはキックオフシンポジウムを開催し、一年後の2021年12月には一年間の研究成果を報告するシンポジウムを三日間にわたって開催しました。それに加えて、最終成果報告会や報道機関向けのプレスリリースを行い、成果報告会の様子はNHKのニュースでも放送されました。

本プロジェクトが目指したのは、新型コロナウイルス感染症に関する現状の理解に加え、新型コロナウイルスが存在する世界で我々はどのように生きればよいのか提言することでした。研究成果報告にも、各自の専門分野における研究成果の報告とあわせて、提言が含まれています。分野によっては、そのような提言を行うことは自身の専門分野の外へ踏み出すことになる場合もあります。しかし、新型コロナウイルス感染症には、山口大学全体の幅広い専門家の叡智を集結することが期待されており、そのためには学問の境界を意識的に超えることが必要であろうと考えました。「コロナの時間学」の研究成果報告書は研究所の特設ページ

(http://www.rits.yamaguchi-u.ac.jp/?page_id=2424)にて公開されており、どなたでも自由に閲覧が可能です。

「コロナの時間学」のような文理の枠を超えたプロジェクトの実施は、時間学研究所ならではのものです。時間学研究所では、今後も同様のプロジェクトを継続的に実施していくことを予定しています。



岡学長あいさつ



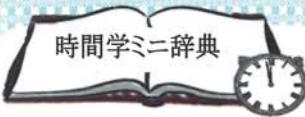
発表の様子



質疑応答の様子



インタビューを受ける藤澤所長



2001年より、ドイツのハルバーシュタット市にある以前は教会として使われていた建物で、作曲家ジョン・ケージ（1912 - 1992）の『オルガン²/ASLSP』という作品が演奏されている。タイトル「As Slow as Possible =可能な限り遅く」の文字通り、各音符やコードは特殊なオルガンで数ヶ月間、ないし数年間かけて鳴り響く。2020年9月5日の音符の変更以来、次は2022年2月5日、そして2024年2月5日に行われる。演奏時間は639年と想定されている。この長時間に及ぶサウンド・プロジェクトは、ケージの指示に従い最大限の減速で遂行されている。作曲家の生前には実現しなかつたが、現在はハルバーシュタット・ジョン・ケージ・オルガン財団により実施されている。我々はこの作品のごく一部しか鑑賞できず、時間そのものと私たちの寿命の関係を考えさせられる。

万古、動植物は冬眠、萌芽や開花、巣作りや繁殖などをあるがままに生きている。他方、人類は冬が終わらない恐れや太陽の恵みへの希求から、祭事や儀式を考案した。そして太陽と星の動きを観察し、時間を測定することを学んだ。哲学者カントが「知る勇気をもて」と言った通り、啓蒙思想の時代に人類は神の秘密の数式を覗きこんだようである。その結果、科学は自然の支配に成功してきた。医学や工業、技術を発達させ、食料や物資を必要なだけ確保し、病気を治療し、寿命を延ばしてきた。しかしながら、フロイトは、人間は相変わらず本能や欲望に支配されているとし、自然と文化の対立について論じた。自然をコントロールすることは、たしかに近現代の理想である。しかし、新型コロナウイルスのパンデミックにより、私たちは自然と共存する存在であることに改めて気付かされている。

社会学者のU.ベックによると、科学技術の進歩による自然の支配と地球の生命基盤の破壊は切り離せない。別な観点からフランスの哲学者M.セールは、宇宙の知識は人間の重要性を薄れさせると指摘した。人間は世界の中心的な存在であると信じてきたが、実際のところは無限に広がる宇宙の端の何百万個もある太陽系の一つに生存しているにすぎない。

音波である音楽は、電磁波とは異なり、媒体として空気を必要としている。地球を包む大気は、人類の生命と音楽の演奏の両方に必要不可欠なのである。639年間後に人類は別の天体に移っているのか、地球は使い捨てられているのか、それともまだバッハの音楽を響かせる生命の惑星でありつづけているのだろうか。

エムデ・フランツ、人文学部 教授・時間学研究所 兼務所員

参考資料

カント、イマヌエル/中山元訳『永遠平和のために/啓蒙とは何か』、光文社古典新訳文庫、2006年

セール、ミシェル/米山親能訳『五感一混合体の哲学』、法政大学出版、1991年

フロイト、ジークムント/中山元訳『幻想の未来/文化への不満』、光文社古典新訳文庫、2007年

ベック、ウルリッヒ/東 廉/伊藤 美登里訳『危険社会』、法政大学出版局、1998年

ハルバーシュタットのOrgan²/ASLSPについて: 1) [https://ja.wikipedia.org/wiki/オルGAN%5E/ASLSP](https://ja.wikipedia.org/wiki/オルガン%5E/ASLSP)

2) <https://www.youtube.com/watch?v=6yUzaZDq3Hg>

短いバージョン: Organ²/ASLSP (演奏: Gerd Zacher) https://www.youtube.com/watch?v=ErN_hc_FfIU

時間学研究所の設置目的は、時間学という新たな学問を作り発展させることです。トップダウンで与えられた時間学という看板を掲げることはできても、魂が入らなければいずれそれは消滅してしまうでしょう。まだ形のない学問にどのように形と中身を与えるか、これはなかなか難しい問題ですが、逆に言えば自由な発想で様々なことを試すことができます。その一つの試みが書籍として時間学を形にすることです。時間学研究所は「時間学の構築」と称するシリーズ書籍を2015年から継続的に発行しています。全8巻を出版予定であり、完結すれば時間学の一つの形を示すものとなることを期待しています。

そのちょうど半分となる第4巻が、今年（2022年）2月に発行されました。副題は「現代社会と時間」です。5名の著者によって多彩な観点から現代社会と時間の関係が考察されていて、時間学の構築というタイトルに相応しい内容になっています。

この本は論文集の体裁をとっており、まずは社会学や文学などを専攻する大学高学年、大学院生、研究者が読者として想定されています。しかし私としては、これを理系の研究者の方にも読んでほしいと思っています。その理由は単純で、面白いからです。例えば第5章では「泥酔者たちの時間」と題して、近代の飲酒と時間意識の関係が論じられています。お酒をたしなむ人は多いと思いますが、盛り場に繰り出しても多くの方は帰宅の都合を考えながら飲酒をされることでしょう。これが実は明治以降の近代に形作られた時間意識の表れであることが、多くのデータを参照しつつ明らかにされます。私たちがそれと意識せずにとっている時間にかかる行動がどのように形成されたのか、(酔っぱらいの繰り言ではなく)正確に理解できるのは面白いことではないでしょうか？このほかにも面白さが盛りだくさんです。

ぜひご一読を！



第1章	近代社会における質的な時間体験 (右田裕規)
第2章	司馬遼太郎ブームとビジネス教養主義—ポスト高度成長期における「歴史」と「誤読」 (福間良明)
第3章	集合的アイデンティティの経時的变化—ASEAN諸国サッカー代表選考の動向から (阿部利洋)
第4章	フォレンジックスの複数の時間—エヤル・ヴァイツマン『フォレンジック・アーキテクチャ』の時間論的読解 (近森高明)
第5章	泥酔者たちの時間—東京人の余暇とアルコールの歴史 (右田裕規)
第6章	「懐かしさ」の時間学—戦後引揚者による語りから (仁平千香子)

《時間学研究所》

〒753-8511

山口市吉田 1677-1

TEL/FAX : 083-933-5848

jikann@yamaguchi-u.ac.jp

